



利根山先生

Toneyama Kojin

記念美術館通信

Memorial Art Museum News Letter

〒024-0043 岩手県北上市立花 15-153-2

TEL/FAX 0197-65-1808

令和元年度後期企画展 「いきもののまなざし」 菊池咲展 11/30日(土)まで

無邪気であること～原点への回帰

今回の企画展は大作が多く、常設展示室では利根山画伯の200号の油彩作品と堂々と渡り合っている。

和紙にしっとり岩絵の具を浸透させる菊池咲さんの日本画の作品は、原色を画布にぶつける挑発的な利根山画伯の作品とは一見対極にあるように思える。しかし、ふと気づくとテーマはどちらも鹿をモチーフにし、片や自然のなかに静かに息づく野生の鹿であり、片や擬人化された鹿踊りの衣装としての鹿。意図せずしてここに配置された運命めいた不思議さを感じるのである。



菊池咲さんには流儀があり、動物とは感情的にも物理的にも対等でちょうどよい距離を保ち、その関わりを通して自然との共存を考えるとという視点を持つ。描かれる動物は愛らしく無邪気であるが、時には人間の意図を超えた計り知れない透徹した視線をも感じさせる。

「邪心を捨て、欲することなく穏やかに生きよ。」という人間へのメッセージとも捉えられる。

「無邪気さ」とは幼児の戯れやあどけなさということと同時に、人間の本来あるべき姿も示唆し、利根山画伯がマヤの古代人の造形や世界各地の祭りに感動したのは、そこにそうした「無邪気さ」に通じる人間のエネルギーや「原点」があったからである。

学徒動員で、さらにはヒロシマ、ナガサキで多くの知人友人を失った利根山画伯が晩年に版画で表現したのも「人間よ原点に返れ!」という強い訴えであったと言える。

咲さんが動物との関わりで大切にしているのもこの「原点」なのかもしれない。



貿易摩擦、領土問題、戦後処理など国家間の緊張が高まり、人間の都合によりゆがめられてきた自然環境はもはやコントロールのきかない状況も感じられる。今こそ「原点に回帰する」ためのリセットが求められる時かもしれない。

そんな視点から見ると今回の利根山画伯と菊池咲さんのコラボは意味を持ち、一つのメッセージとしてさらに私たちの心に響くのではないだろうか。

秋晴れの下、美術館周辺ににぎやかな親子の声 8/31(土)親子秋まつり



恒例の秋の美術館行事です。館入口の駐車場や階段下では親子づれ約120人が秋まつりを楽しみました。道路には思いっきりチョークで動物やアニメのキャラクター、似顔絵などが、壁の模造紙にはたくさんの動物が思い思いに描かれました。



また、絵の具を混ぜたシャボン液を画用紙に吹きかけシャボン玉アートや、うちわを使って大きなシャボン玉をつくり青空に飛ばしました。

『利根山画伯が遺したもの』に描かれたアトリエ建築の頃 その2

前号に続き、高橋喜太郎著「利根山画伯が遺したもの」より。この本には地元住民だけではなく実に多くの著名人が登場する。

信州上田の無言館館主、窪島誠一郎氏もその一人で、「利根山光人の遺言」という文を書いている。

「表現者が時代や社会に対してどう立ち向かうべきか、戦争の愚かさや自由への権力の介入に対してどうたたかうべきか、利根山先生はいつもそのことを自問し、その自問から数多くの作品を生み出した芸術家だった。」

絵画教室受講生8名に修了証

今年度の絵画教室が終了しました。春から10回にわたる講習会で基本となる絵画技法を学んだ8名の受講生が修了証を受け取りました。

一枚の絵に対する集中力が高く、課題意識を持ってまじめに取り組んでいただきました。講習も半ば頃から互いの作品の感想を述べるなど関わりの中でチームとして高め合う雰囲気もできてきて、上達も著しいものがありました。

ぜひ絵画展などにも出品し、絵画と共に歩む生活を実践して行ってほしいものです。

修了おめでとうございました。



絵画教室修了生による修了展のお知らせ

日時 令和元年11月23日(土)～12月13日(金)

場所 〒024-0061

北上市大通り一丁目3番1号

おでんせプラザぐるーぶ 3階

生涯学習センター ミニギャラリー

時間 10時～21時

この本には、人なつこく誰とでも親しみ、好奇心旺盛な画伯の人柄が多く語られて、加えて行動的な性格が取り巻く友人たちの大きな関心を買っていたことがわかる。しかし、メキシコ国立美術学校教授で画家でもあるルイス・ニシザワ氏を含む一行が沢内村経由で盛岡の橋本美術館を訪ねようとした時のくだりで興味深い記述があった。

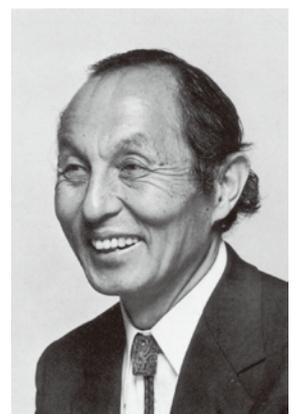
沢内村の碧祥寺博物館に飾られていた菊の紋章入りタバコを目にした利根山画伯は、「こんなものにだまされて、何十万人も死んだんだ」と吐き捨てるようにつぶやいた。・・・という。

要するに戦争の犠牲者を悼む発言なのであるが、それまでの明るくにぎやかな交流の状況から一転して、画伯がこのように強い批判精神をむき出しにした生々しい発言に、読んでいてハッとするものがあった。

さらには本の終盤でもこう語る。「私は学徒出陣の一人だから、多くの友人を戦争で失った。こんな日本になるために彼らは死んでいったのではないと思うと、ヒロシマのことは描き継がねばと思うのです。」

窪島氏の文の内容と合わせて、改めて画伯の社会的視座を持ち続ける姿勢の一貫性を見る思いがする。

画伯の制作のエネルギーの本質はこういうところにあり、「反骨の画家」「社会派の画家」とも呼ばれる所以でもある。



冬季休館のお知らせ

2019年12月1日(日)～2020年3月31日(火)まで冬季休館となります。

来年度は2020年4月1日(水)より通常開館となります。

休館中のお問い合わせは北上市まちづくり部生涯学習文化課となっております。